

おくのほそ道『旅立ち』定期テスト対策問題 | 現代語訳・文法・俳句の頻出設問と解答 解答・解説

問1 答え：月日は永遠に旅を続ける旅人のようなものであって、来ては去り去ってはまた来る年もまた、(同じように) 旅人である。

「月日(=時間)は止まることなく過ぎていく旅人だ」という、時の流れを旅にたとえた書き出しです。この一文は、中国・唐の詩人李白(りはく)の「春夜宴桃李園序(しゅんやえんとうりえんのじょ)」の一節をふまえているとされます。

問2 答え：技法名=対句(ついく)。

「月日は百代の過客にして」と「行きかふ年もまた旅人なり」が対応しています。「月日/行きかふ年」(=時間)、「百代の過客/旅人」(=旅をする者)というように、似た組み立ての句を並べることでリズムを生み、「時の流れは旅である」という主題を強く印象づけています。

問3 答え：永遠に旅を続けていく旅人(旅客)という意味。

「百代(はくたい)」は「永遠・いつまでも」、「過客(かかく)」は「通り過ぎていく旅人」のこと。つまり「月日は、永遠に止まることなく過ぎていく旅人のようなものだ」と、時間の流れを旅人にたとえています。

問4 答え：イ(断定の助動詞)

「旅人なり」の「なり」は、「年もまた旅人である」と言い切る断定の助動詞「なり」の終止形です。直前が「旅人」という体言(名詞)であることが見分けのポイント。体言に付く「なり」は断定、活用する語の終止形に付く「なり」は伝聞・推定です。

問5 答え：船頭(舟をあやつる人)と馬子(うまかた。馬をひいて荷や人を運ぶ人)。

どちらも一生を旅の上で過ごす職業で、「旅をすみか(住まい)とする」生き方の例として挙げられています。

問6 答え：毎日が旅であって、旅そのものを自分の住まいとしている。

「すみか」は「住みか=住まい」のこと。一生を旅の中で送る人々の生き方を言い表した部分で、芭蕉自身の旅へのあこがれにもつながります。

問7 答え(例)：日本=西行(さいぎょう)/宗祇(そうぎ) 中国=李白(りはく)/杜甫(とほ) など。

「古人(昔の人)」とは、旅を続けて旅の途中で生涯を終えた風雅の先人たちを指します。芭蕉が敬愛した西行法師や連歌師の宗祇、唐の詩人李白・杜甫などが念頭にあったとされます。いずれか一人ずつ書けていれば正解です。

問8 答え：昔の人にも、旅の途中で(旅先で)亡くなった人が多くいる。

「死せる」はサ変動詞「死す」の未然形「死せ」に、完了・存続の助動詞「り」の連体形「る」が付いた形で「死んだ・死んでいる」の意(「り」はサ変の未然形・四段の已然形に接続し、ナ変「死ぬ」には付かない)。

「あり」は「いる・存在する」。旅に生き旅に死んだ先人たちへの、芭蕉の強いあこがれが読み取れます。

問9 答え：空にちぎれて浮かんでいる一片の雲。

「片雲(へんうん)」は、ちぎれ雲・ひとひらの雲のこと。風に流れていく一片の雲に誘われるように、芭蕉の

心も旅へと動き出した、という情景です。

問10 答え：どこかへ旅に出たくてたまらない、当てもなくさすらいたいという気持ち。

「漂泊」はあてもなくさまよい歩くこと。空をゆく一片の雲（片雲）に誘われるように、芭蕉は旅への思いを抑えきれずにいます。続く「そぞろ神の物につきて心をくるはせ」「道祖神の招きにあひて、取るもの手につかず」も、旅へとはやる落ち着かない心を表しています。

問11 答え：ウ（意志）

「白河の関越えん」は「白河の関を越えよう（越えたい）」という意志を表します。助動詞「む（ん）」は、文末や「～んと」の形で意志・推量などを表し、ここでは作者自身の「～しよう」という気持ちなので意志です。

問12 答え：そぞろ神＝人の心を旅へとそわそわかき立て、誘い出す神。 道祖神＝旅人を守り、また旅へと招く道の神。

「そぞろ神」は人を落ち着かなくさせ旅へ誘う神、「道祖神（どうそじん）」は道や旅の安全を守る神で、村境や道ばたにまつられました。どちらも芭蕉を旅へと駆り立てる存在として書かれています。

問13 答え：旅に出たい気持ちが強すぎて、何を手に取っても落ち着かず、旅の支度以外は手につかない（何も手につかない）状態。

「取るもの手につかず」は、そわそわして仕事や用事が手につかないことを表す慣用的な言い回しです。旅へとはやる芭蕉の高ぶった心がよく表れています。

問14 答え：長旅にそなえて、足の「三里」のつぼにお灸をすえること。

「三里」はひざ下にあるつぼの名で、ここに灸をすえると足が丈夫になり旅の疲れに効くとされました。これから始まる長い徒歩の旅の準備の一つです。

問15 答え：自分が長く住んだ質素な草庵にも、今度は新しい住人が移ってきて、雛人形を飾るような華やいだ家になるのだなあ、という住みかの移り変わりへのしみじみとした感慨。

「草の戸」（粗末なわが住まい）と「雛の家」（女の子のいる明るい家）が対比され、自分が旅立ったあとに新しい家族が暮らす情景を思いやる気持ちがこめられています。芭蕉自身には妻子がいなかったため、その対照がいつそう感慨を深くしています。

問16 答え：季語＝雛（ひな／雛の家）、季節＝春。

「雛」は三月三日の雛祭り（上巳の節句）に関する語なので、季節は春です。発句の中の季語と季節を問う頻出問題なので、セットで覚えましょう。

問17 答え：切れ字＝ぞ。働き＝意味を強め、句にいったん大きな切れ目（区切り）と感動の高まりを与える働き。

「ぞ」は強意の切れ字で、「住み替はる代ぞ」と詠嘆をこめて言い切ることで、住みかが移り変わっていくことへのしみじみとした感慨を強調しています。

問18 答え：面八句（連句の発句にはじまる八句）を作って、（旅立つ前に）住みなれた庵（いおり）の柱に書いて掛けておく、ということ。

「面八句（おもてはつく）」は連句（俳諧）の初めの八句のこと。旅立ちにあたり、その八句を庵の柱に掛けて別れのしるしとした、という場面です。

問19 答え：作者＝松尾芭蕉（まつおばしょう）、同行した弟子＝河合曾良（かわいそら）。

芭蕉は弟子の曾良を伴い、江戸を発って東北・北陸をめぐり、大垣（おおがき）に至るまでの旅をしました。

問20 答え：俳諧紀行文（紀行文）。

旅の体験を文章でつづりながら、その折々によんだ俳句（発句）を織りこんでいく形式の文学です。『おくのほそ道』はその代表作とされます。

問21 答え：時代＝江戸時代、元号＝元禄（げんろく）。

『おくのほそ道』は江戸時代前期、元禄文化のころの作品です。芭蕉の旅は元禄二年（一六八九年）、作品の刊行は元禄十五年（一七〇二年）とされます。